

額田王のおほきみ ぬかたのおほきみ 和へ奉る歌一首 こた まつ

一一二番

古に いにしへ 恋ふらむ鳥は こい とり ほととぎす けだしや鳴 な
きし 我が恋ふるごと

吉野より昔生せる松が枝を折り取りて遣る時 よしのより ことむ せむ せむ せむ

に、額田王の奉り入るる歌一首 ぬかたのおほきみ たてまつ

一一三番

み吉野の よしの 玉松が枝は たままつ え 愛しきかも 君がみ言を きみ こと
持ちて通はく ま かよ

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇 たぢまのひめみこ たけちのみみこ いま ほづみのみ

子を思ひて作らす歌一首 こ

一一四番

秋の田の あき た 穂向きの寄れる ほむ よ 片寄りに かたよ 君に寄り きみ よ
なな 言痛くありとも こちた